

たのであつた、話は變るが同じ天子の使が日本に来て、室町將軍から受けた待遇と思ひ合せると、誠に好箇の對照である。

此の如き有様で、帖木兒は夙くから明を敵と認めて居つたのであつたが、然も支那なる國に對してはその強大な  
ことについて少からぬ恐れを持つて居つたのである、曾て洪武二十七年八月に彼が明に奉つた上表なるものが、實  
錄、明史などに見えて居る、（殊域周咨錄には二十年の上表として見えて居るが誤りである）、武備志の編者茅元  
儀は、其の上表文を帖木兒の許に居る支那人が書いたものと見て、文體甚だ古人に似て居るなど云ふて居るが、  
如何であらふか、自分は之を以て例の使譯館員の翻譯したものにすぎぬと思ふ、とにかくその表文を見ると、假  
令それが言辭の巧妙を極むる必要があつたにもせよ、如何に彼が支那の富貴強大を敬慕して居るかの一端が窺はれ  
る、當時支那の有様を撒馬兒罕でどんな風に語り傳へて居つたかといふことも、亦西班牙使節の記する處によつて  
知ることが出来る、「支那の帝都はカンバルタブリヅ市の二十倍程の大ききがある、タブリヅでも町の長さ一リーグ許りあ  
るからして、支那の帝都は實に二十リーグの長さのあるわけで、世界中最大の都である、その皇帝は莫大な軍隊を  
持つて居る、其の境を越えて出軍する時には、從軍の士卒は別として、留守の騎士丈で四十萬、或はもつと以上  
の數に上る、そうして千人の部下を有するものでなければ馬に乗ることを許されないのである、其の他驚嘆すべき  
ことの數々が、支那及びその帝都について語られたのを聞いた」と書いてある、尙ほまた支那の製產品は、此の地  
方で非常な聲價を有したもので、支那人なるものは世界中で最も技工に秀でたものとせられて居つた、それで「支  
那人は兩眼、歐人は隻眼、回教徒は盲目である、從がつて回教徒は何處の國民からも利益を享ける」といふ様な話